

夢見たものは……

立原道造

ゆめみ
夢見たものは ひとつの幸福こうふく

ねがつたものは ひとつの愛あい

やま
山なみのあちらにも しづかな村むらがある

あか にちようび あお そら
明るい日曜日の 青い空がある

ひがさ いなか むすめ
日傘をさした 田舎の娘らが

き うた
着かざつて 唄をうたつてゐる

おお わ
大きなまるい輪をかいて

いなか むすめ おどり
田舎の娘らが 踊ををどつてゐる

つ
告げて うたつてゐるのは

あお つばさ いちわ ことり
青い翼の一羽の 小鳥

ひく えだ
低い枝で うたつてゐる

ゆめ あい
夢見たものは ひとつの愛

ねがつたものは ひとつの幸福こうふく

それらはすべてここに ある と

夢

中原中也

ひとよかねど すきより みれば、
一夜鉄扉の 隙より 見れば、

うみ とどろ なみ おど
海は轟き、浪は 躍り、

わたし かみげ
私の 髪の毛の なびくが ままに、

ほのお ゆ ほのお き
炎は 揺れた、炎は 消えた。

わたし ひ き まえ
私は その燭の 消ゆるが 直前に

くろ なみま しょうに はは
黒い 浪間に 小児と 母の、

しろ かいな もが み
白い 腕の 蹴けるを 見た。

その きえぎえの こえ き
その きえぎえの 声さえ 聞いた。

ひとよかねど すきより みれば、
一夜鉄扉の 隙より 見れば、

うみ とどろ なみ おど
海は轟き、浪は 躍り、

わたし かみげ
私の 髪の毛の なびくが ままに、

ほのお ゆ ほのお き
炎は 揺れた、炎は 消えた。

夢と現 金子みすゞ

ゆめ
夢がほんとでほんとはゆめ
夢なら、

よかろうな。

ゆめ
夢じゃなんにもき
決まってないから、

よかろうな。

ひるまのつぎ
次は、よる
夜だってことも、

わたし
私がおうじょ
王女でないってことも、

つき
お月さんはて
手ではと
採れないってことも、

ゆり
百合のなか
中へははいれないってことも、

とけい
時計のはり
針はみぎ
右へゆくってことも、

し
死んだひと
人たちがいないってことも。

ほんとなんにもき
決まってないから、

よかろうな。

ときどきほんとはゆめ
を夢にみたら、

よかろうな。

蝶を夢む

萩原朔太郎

ざしきざしきのなかで おおおおきなあつぼつたいはね翼をひろげる

ちょうちょうのちひさな みにくみにくかおかおとそながながいしよくしゆしよくしゆと

かみかみのやうにひろがる あつぼつたいおもつばさの重みと。

わたしはしろしろいねどこねどこのなかでめめをさましてゐる。

しづかにわたしはゆめゆめのきおくきおくをたどらうとする

ゆめゆめはあはれにさびしいあきあきゆうゆうのものがたりものがたり

みずみずのほとりにしづみゆくらくじつらくじつと

しぜんにくさくさりゆくふるふるあきやあきやにかんするかなしいものがたり物語。

ゆめゆめをみながら わたしはおさおさごごのやうにな泣いてゐた

たよりのないおさおさごごのたましいたましいが

あきやあきやにわにわははくさくさむらのなかなかで しめつぽいひきがへるのやうにな泣いてゐた。

もつともせつないおさおさごごのかんじょうかんじょうが

とほいみずべみずべのうすらあかりをこいこいするやうにおち思はれた

ながいながいじかんじかんのあひだ わたしはゆめゆめをみてな泣いてゐたやうだ。

あたらしいざしきざしきのなかで ちょうちょうがはね翼をひろげてゐる

しろしろい あつぼつたい かみかみのやうなはね翼をふるはしてゐる

夢見たものは……

立原道造

夢見たものは ひとつの幸福

ねがったものは ひとつの愛

山なみのあちらにも しづかな村がある

明るい日曜日の 青い空がある

日傘をさした 田舎の娘らが

着かざつて 唄をうたつてゐる

大きなまるい輪をかいて

田舎の娘らが 踊ををどつてゐる

告げて うたつてゐるのは

青い翼の一羽の 小鳥

低い枝で うたつてゐる

夢みたものは ひとつの愛

ねがったものは ひとつの幸福

それらはすべてここに ある と

夢

中原中也

一夜鉄扉の 隙より 見れば、
海は轟き、浪は 躍り、
私の 髪毛の なびくが ままに、
炎は 揺れた、炎は 消えた。
私は その燭の 消ゆるが 直前に
黒い 浪間に 小児と 母の、
白い 腕の 蹴けるを 見た。
その きえぎえの 声さえ 聞いた。
一夜鉄扉の 隙より 見れば、
海は轟き、浪は 躍り、
私の 髪毛の なびくが ままに、
炎は 揺れた、炎は 消えた。

夢と現 金子みすゞ

夢がほんとでほんとは夢なら、

よかろうな。

夢じゃなんにも決まってないから、

よかろうな。

ひるまの次は、夜だってことも、

私が王女でないってことも、

お月さんは手では採れないってことも、

百合の中へははいれないってことも、

時計の針は右へゆくってことも、

死んだ人たちがいないってことも。

ほんとになんにも決まってないから、

よかろうな。

ときどきほんとは夢にみたら、

よかろうな。

蝶を夢む

萩原朔太郎

座敷のなかで 大きなあつぼつたい翼をひろげる

蝶のちひさな 醜い顔とその長い觸手と

紙のやうにひろがる あつぼつたいつばさの重みと。

わたしは白い寢床のなかで眼をさましてゐる。

しづかにわたしは夢の記憶をたどらうとする

夢はあはれにさびしい秋の夕べの物語

水のほとりにしづみゆく落日と

しぜんに腐りゆく古き空家にかんするかなしい物語。

夢をみながら わたしは幼な兒のやうに泣いてゐた

たよりのない幼な兒の魂が

空家の庭に生える草むらの中で しめつぽいひきがへるのやうに泣いてゐた。

もつともせつない幼な兒の感情が

とほい水邊のうすらあかりを戀するやうに思はれた

ながいながい時間のあひだ わたしは夢をみて泣いてゐたやうだ。

あたらしい座敷のなかで 蝶が翼をひろげてゐる

白い あつぼつたい 紙のやうな翼をふるはしてゐる